

翻刻『会稽多賀堂』(上)

翻刻の会

- 一、底本には刷りが比較的よいと思われる、大阪府立中之島図書館の七行九十七丁本を用いた。
 - 二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。
 - 1 本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類、会話の途中等では改行しなかった。
 - 2 各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を（ ）で示した。
 - 3 仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。
 - 4 漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。
 - 5 漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。
 - 6 特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。
 - 7 畳字は、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ヽ」、漢字は「々」に統一した。ただし、「く」はそのまま残した。
 - 8 文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。
- 三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会(学部学生の研究会)の会員によってなされた。
- 樋口孝栄、前泉有里、内川澄恵。
- 文字譜、改行及び本文の最終確認は山田和人が担当した。

(山田和人)

浅沢の杜若
吉原の庭桜
会稽多賀誉

座本 竹本金藏
後見 竹本政太夫

元弘建武の大乱げんくわうけんぶも切鎮きつちんたる足利あしかがの。数代重かずよする家の風。靡なび随まふ其中うちに。南なん朝ていの余類よるい迎むかえばぬ譬たとへ蟪蛄かいこ。己おのれレを知らぬ工くわミにて。屢しばしば四海しやうかいを騒さわがせば。今いまもや戸とざす清見きよみが関せき。固かたの役やくの足利あしかが武士ぶし兵具へいぐにひしと身みをかため。眼くまを配ばいし有様あさまマは事こと嚴げん。重おもに見みへにけり。

関せきのこなたの門かど外がわに差扣さひくへたる諸家しよかの武士ぶし。関所せきじよに向むかひ声こゑ高く(一オ)某事なにかは仁木にぎ彈正だんせいが家中うち筆ふで森もり甚し右衛門ゑもん。固かた拙せつ者は細川ほそがわ頼より之のが家いへ来きた黒崎くろさき文太ぶんた。關せき石堂いしかた右馬うまノ頭かみが家臣いへ刻は川がわ金兵衛かねべゑ。其外そのほか西国さいこく方かたの家中うちの者もの共ども。一いつツ昨日きのうより御頼ごらん申まをせし通り。何卒なにとぞ此関所このせきじよを。御通ごとほしくださる、様さま偏ひとへに頼よりみ存ぞんると詞ことばを揃そろへ申まをにぞ。固かた関守せきしゆこなたに打向うちむかひ。再度またの御頼ごらんみ御尤ごよしもなれ共先達ともだちて申渡まをせし通り。此度このたび鎌倉かまくらに謀叛ひそなの族むら有あて事ことをなさんと計はかる故ゆゑ。俄にわかに固かたむる此関所このせきじよ。往來むかひをとむるも武將ぶしやう(一ウ)家の下知したちとして我々われらが計はからひならず。ナフ刑部けいぶ殿どの。固かた成程なりほど数馬かずうま之助のすけ殿どの申まをさる、通り。かく騒動さわどうの時節ときせふなれば武家公家ぶけきやこうけの御内ごうちは申まをに及およばず。町人ちやうじん百性ひやくせいに至いたる迄まで堅かたく往來むかひは叶かなひませぬと。尖すずこき詞ことばに諸家中しよかちゆうは。固かた詞ことばスリヤいか様に申まをてもお通とほし下くださる、事は叶かなひませぬか。固かたハテ嚴命げんめいなれば是非せいひに及およばぬ。今暫いましばらくく御逗留ごとらう有あて開ひらい門かどの時節ときせふを相待あひまちれてよからふと。固かた聞きいて皆々みな投な首くびししばし詞ことばもなかりしが。いづれもお聞きなさる、通り。嚴重げんじゆうたる御兩人ごにりやうのお詞ことば。固かたハテ扱あつかひ(二オ)難義なんぎな事ことでござる。此上この上は是非せいひに及およばぬ。又々またまた旅宿りよしゆくへ立帰たてかへり。開ひらい門かどの時節ときせふを待まちて通りませふ。固かたいか様さまマ左様さやうと打連うちづて迷惑めいわくながら諸家中しよかちゆうは。

旅宿をさして立帰る。

廻跡地ハルに佐山さが数馬色に向ひ。ナニ坂本殿。此頃鎌倉の騒動たじかな様フ子お聞なされたかと。圃地ハルいへば数馬は小声色に成。なる程佐
 山殿にお咄申さんと存る折から。先刻鎌倉より密ひそかの注進ちゆうしん。彼ノ宇治うぢの常悦しやうえつが隠謀みんぼう頭づハレ切腹致し相果る。鞠まりケ瀬せが一統いつどうも
 過半くわはん召捕りしといへ共。いまだ爰あかしこに隠れ忍ぶとの義ぎでござる。圃地ハルム、いか様マ左様でもご二ウさらふ。然らば往来
 の人留とどメも今暫くと相見へまする。ヤイ者共此上共に油断ゆだんなくソレ心を付よと。兩人が猶おとこ厳かたに守り居る。圃地ハル清見きよみが関せきに影見
 ゆる。其望月もちづきのかゞみ山。早枝さわえだの家の譜代ふだいの臣からほし。唐橋からはし作十郎は鎌倉の。騒さわキにいとゞ急いそがる、旅たびの道みちさへ俣まならで閉ふる。心
 も板庇いたひだし関せきのこなたに立寄たて。圃地ハルッア。昨日御届ごとどケ申せし多賀たがの家中。唐橋からはし作十郎でござる。御両所ごりやうへ直談ちくたんの義もござれば。
 開ひらイ門かどの義を頼たのみ存ぞんる。此旨取次このさし呉くれられよと。圃地ハル聞きて下部したが二人ふにに向ひ。昨日けふ至いたり着き致いたされし多賀たがの家中唐橋からはし作十郎殿。御両
 所ごりやうへ御直談ごちくたんの旨こころ有あれば。開門ひらかちのお頼たのみ。いかゞ二三才計はかひ申まさんやと伺うかへば。圃地ハル刑部けいぶ頭づを打振うち。我々われらに直談ちくたんとはやはり
 関所せきじよを通して呉くれよとの事こと所詮しよせん叶かはぬほつ返かへせと。圃地ハルいふに数馬かずまか暫しばしととゞめ。ナニ佐山殿。当時武将ぶしやうの御覚ごさくよき多賀たがの家
 中。直談ちくたんと有あり様子ようすも聞きず其俣まには帰かへされまい。一ひと通り承うけはつた上の事ことと。圃地ハルいへば刑部けいぶは不興ふけうげに。ア、無益むえきの事に隙取ひま
 は面倒めんどうなれ共。相役あひやくの其元そのもとのお詞ことば無下なげにも致いたされまい。去いりながら家来けらいの分ぶんは相叶あひかはぬ。作十郎一人門かどを開ひらいて是へ通とせ
 圃地ハルハツと下部したが門外かどへ。御直談ごちくたんと有あり故御一人ゆゑごひとりはお通とし申。御家来衆ごけらいしゆは相叶あひかひませぬと。云いつ、開ひらく門かどの外とち。圃地ハル作十郎は家来
 を招まき。ヤイ其方そのかたはなと耳みみに三ウに口くち。圃地ハル合点あてんか。圃地ハルハア畏かしこまつてござります。圃地ハル早行はやぎやう。くとかしこに追おやり。しづく
 と打通うり。圃地ハル兩人ふにに黙もく礼れいし。圃地ハル御両所ごりやう共どもに。御勤番ごきんぱん御苦勞ごくろうに存ぞんると。圃地ハル挨拶あいさつ有ありは数馬かずま之介のすけ。役義やくぎなればさのみ苦勞くろうにも存ぞんぜぬ。

シテ我々に御直談とはいか様フの義でござるな。㊦アイヤ余の義でもござらぬ。昨日より再度も申上る通りと。㊦聞て刑部か。イヤ此間所往來の義でござらふならば叶イませぬ罷成ませぬと。㊦にべなき詞に猶も手をさげ。成程お役目を大切に思召ての義。御尤に存る拙者が主人多賀の大領。在鎌倉と申。又常々家中の者へ申渡さるゝには。鎌倉の大イ変と承らば一時も早くかけ付。武(四オ)将の御所を相守るが肝要と。急て申付ござれば。ケ様フの時節に遅參致すは不忠の至り切腹にも及ぶべき事。斯申せば。武士たる者の一命を惜むに似たれ共。何の益なき犬死を致さば。唐橋の苗字の穢れ二つには主人の名迄汚す道理。そこが武士は相互。御兩人のお心入を以て。拙者が家来計御通し下されふならば千万忝ふ存ると。㊦頼めとさ。らに聞入ず。コレサ作十郎殿。ソリヤ昨日より申さるゝと同シ事。其方が遅參して不忠ならば此方も通しては役目の無念越度に成ます。㊦ソリヤいか様にお頼申ても。㊦くどい事成ませぬと。㊦するどき詞に思案(四ウ)を極め。然らば後日に御兩所の越度にならざる様。質物を差置ませふ。がいかがでござる。㊦フウシテ又拙者共か申訳に成べきと有質物はいか様の品でござる。㊦ソリヤ外でもござらぬ。拙者が片腕。㊦ソリヤ其馬手の片腕を。質物とな。㊦成程。御先祖八幡殿。近くは楠正成是等の名将は。計略を以て諸軍をつかふ。我々ごとき侍は戦場に臨分捕高名が第一。其高名致す此片腕。夫レを当所に残し置が。拙者が質物でござると。㊦聞て数馬は打点キ。御尤のお詞我々が役目を思召て。まさかの時の御用に立る片腕の質物。㊦ソリヤ御承知でござるかな。㊦いかに承知(五オ)致した上は約束の其片腕と。刀に手をかけ立寄刑部數馬押留。コリヤいかゝなさるゝぞ。㊦イヤ作十郎か広言の片腕イサ請取ふと詰かくる。㊦イヤ騒がれな刑部殿。拙者が片腕をお渡シ申に。其元のお刀は汚さぬ。只今お目にかけませふと。かしこに向ひ。ヤア〜家来共。申付し一品を是へ持。

因ハツと答へて持出る此場の首尾も納れる。印は丸に一文字直ぐ成武士の身のかため。具足の櫃を直し置。圃作十郎詞を改め。戰場にて命を忘るゝは武士の常とは申ながら。まさかの時君の御用に立迄は。全ふするが身の肝要。其命を保つ随一チの此具足。作十郎が片腕共。又両腕共(五ウ) 存るから。此関所に残し置片腕の身がはり何と御承知下されふかな。圃ホ、ウ通の頓智道は多賀のお家柄ヤモ驚キ入た御計ラひ。此上は其元の片腕を清見が関所相守る。坂本数馬之介がしつかりと預り申た。勝ッ手次第に通リ召れいと。圃いふを傍から支へる刑部。イ、ヤそりや成ぬ。譬貴殿が承知さつしやつても。拙者も関所の横目の役。圃サ、其御承知ないを某が我俣の計ひも。やはり武将のお為でござる。圃そりや又どふして。圃ホウ南朝の残党謀叛の萌頭ハレ。或いは亡び。又は召捕るゝといへどいまだ隠し忍ぶ族も有。かゝる時節に武将の膝元。役に立べき武士を(六オ) 都へ通すが我俣かな。圃サア夫は。圃ホウ常悦秋夜が荷膽の武士数多有と承つたが。君の守護する侍を妨召るゝ貴殿の心底。扱は謀反に同心か。圃イヤ全く以て。圃ハテ左様ならば身共が計ひ。横目の貴殿のおとゞめは御無用。圃然らばいか様フ共致さふ併後日にお咎メ有は。圃ヲ、其時は身共が切腹。貴殿のお腹は借ませぬと。圃やり込られてむつと顔。圃作十郎は数馬に向イ。段々の御懇情礼は重て申上ん。圃イヤく是迎も武将の御為。二つには多賀殿の忠勤を感じし故。お礼に及ばぬ急キの道中。圃然らばお暇仕らふ。圃シテ同勢の御人数は。圃以上三百七十五人と。圃聞て佐山が仰天し。纔五百石の(六ウ) 作十郎か同勢三百七十五人とな。合点の行ぬと答る詞。圃数馬引取。俄に多賀は大大名。圃シテ又御辺の合印は。圃丸の内に一文字。圃とくと改通してくれふ。ヤアく者共東西の門を開ケ。因ハツと答へて押開く。

圃坂本数馬声高く。江州かゞみ山の城主多賀殿の家中。唐橋作十郎。同勢三百七十五人通りませい。三人ハツと答へて門外に。

此頃とゞまる旅人共。仁木細川吉良石堂。西国かための諸家の臣。我もくと押合へし合。皆唐橋が合印。扱ッも丸い関守と。真一文字に打通れば。因ひつしと立切西の木戸。脚跡は唐橋兩人に。式礼目札立出る。(七オ)三人外面に待たる諸士の面々。作十郎殿。合印のおかけで。首尾能。脚シイ声が高い。と押ゆる唐橋。脚内にも扱はと氣の付佐山立寄東の門の戸に。圍止まる坂本。因立切下部。脚イサ参らふと夕告の。鳥の音ならぬ弁舌にて。関を遁れし計略を。日本に伝ふ唐橋が。才智の。程こそ三重へ名に高き

第二

東路に。北国とよぶ。吉原の。名にし桜の中の町。みんな見にくる色くらべ老木。若木のわかちなく。花の王位へ参内の杳音。ならぬ駒下駄や。衣紋はいかな大名も。及ばぬ位松田屋の三国といへる全盛の。外八文字の道中に。お先(七ウ)手をふる振袖の。禿か対のきんし紋。帯の厚房挟箱ゆたんに包爪琴も。弓六張の。ためしかや。跡ト備への大尽はかゞみ山の分シ地。大道寺学太郎。己が威勢を花の本ト。町幅狭しと立留り。ナント軍蔵。一双玉臂千人の枕。半点の朱唇万客掌と云しに違はぬ。三国ク一の三国二色香。揚貴妃勝りの。佛は。江口の君に由縁有普賢像より糸桜。少しは風になびけよと。戯れか、れば。三国は浮ぬ物思ひ。罪なふして配所の月と。梅や桜も春風の。障りが有ては中々に。目に付物じやござんせぬと。すんと。背ける。顔にさへ。花と争ふ品形チ。実手折たき。心地せり。傍から差出る松浦軍蔵(八オ)コレサ太夫殿そりやどふでござる。御主人学太郎様は大道寺の若殿。こなたに迷ふて此程の廓通ひ。金銀にお厭ひなく中の町を一面に桜の林も。こなたの心を慰ん為。お心にさへ随へば。直に根引の玉の輿。何シと

乗ル気はござらぬか。ヲ、アノ軍蔵様のいはしやんす事はいな。うはの空吹恋風にも。なびけばなびく客有ど。世に憂ふしの傾城を。国傾くると諷はる、も契る情ケと読マる、も。其源は誠にて。操立るが廓の教へ。野暮な事を云しやんすなど。やり込られて頼ふくらし。せふ事なしに懐中より。筆取出しさらくど。書認るも負おしみ。

学太郎手に取上。ム、ナニ。多賀染の。采女は強い様なれど（八ウ）金の切したは地が弱いから。読ミ人松浦軍蔵。こりや中々出かしおつたと褒美の詞に出かし顔。辺りの桜に結付れば。三国はくはつとせき上て。お心に随はぬ迎当り眼に采女様。恥をか、せる其短冊。そふさしやんすりや猶の事。逢通すのが廓の張。身共の金輪落迄くどき落すが武士の意地。ヲ、しつこふ云つて見る気なら勤メする身の耳の役。ハテモ聞て居ますでござんせふ其願をと学太郎佐相かはれば付々の禿中居が取まいて。せいては行ぬ恋の道。色よい返事松田屋で。晩はお寝間の中直りと。機嫌取々仇口も其場。粉きらし騒キ立。江戸町さして伴ひ行。

大道寺（九オ）美作ノ守義国。けふ遠乗の出立ちも胸に逸物。深編笠。出合頭に軍蔵が。夫と見るより両手をつき。是はく大殿には軽々敷キ御通行と。土に頭をひれ伏は。いかに軍蔵。本家たる早枝の家系。再興せしは我家の高ウ名。夫レに何ぞや今百万石を領する内。纔分地七万石。多賀の大領か旗下にくゝまる。其無念さ止事なし。然るに此度。室町殿の厳命によつて。早枝家の重宝献上の三品。術を以つて奪ひ取は。家押領のよい手が、り。成程イヤモ適の御計略。則チ紅梅の御旗の義は。先キ達て奪ひ置ク。此上は菅家の一軸。柴船の花生。ヲ、サ其術はナコリヤかう。くと点き囁く相口同士。人喰馬の兩人はしめし合して別れける。（九ウ）

雪ゆきと見る。花はなの雪吹ゆきふきを踏ふ分わかけて。こがれ廓かの其主そのぬしに契くわりも深はき中ちゆうの町まち。采女さいにょ之介のすけは立留たてどまりり。コリヤ定平じやうへい太夫たふが急いそッに逢あねばならぬ。中の町まちに待まちて居ゐると。文ぶんおこせしには様子ようすが有あり。心こころならずと立たつ居ゐつ。花はなの香かほしたふ蝶てつ々の春風はるかぜいとふ風情ふうじやう也。い
か様御近習ききじゆも召連つれられず。どれへお越こと思ふたに。夫おとこで様子ようすがさらりと知しれた。先まづ暫しばくと定平じやうへいが。有あ合床あひせう几花いけのかけ。腰打こしうち
かけて采女さいにょ之助のすけ。ナント見事みごとでないか。吉野よしの初瀬はつせも及およばぬと。詠よめる枝えだに以前いぜんの短冊たんさふ。何心なにこころなく手に取とりて。多賀染たがぞめの采女さいにょは
強つよい様なれど。金の切きれたは地ちが弱よわいから。読よみ人ひと松浦軍蔵まつらぐんざう。ム、扱あは三国さんごくか恋こひの意趣いそ。学まな太郎たろうが計はかひにて。(十オ)我われに恥
辱ちをあたふる所存しよこん。うぬ軍蔵ぐんざうめ一討いつたうと欠出くせすを定平じやうへいが留とどめてもまとまらぬ若氣わかしの逸徹いつてつ。ヤレ暫しばくと声こゑをかけ立出た出る唐橋たうきやう瀬左衛
門せざゑもん。聞捨きんせて欠行袖くせかうそで。しつかと留とどめて。チエ、情なさけなや浅あましや。百万石ひやうまんごうの領主りやうしゆたるかゞみ山の御舍弟ごせてい。御部屋住ごべゐぢゆうとは申まをながら
御大切ごたいせつなる御身ごみにて。傾城遊女かやうじゆうにょに魂奪たまひうばはれ。昼夜ひるよを分わたぬ御遊興ごゆうきやう。殊ことに倍臣ばいしんの軍蔵ぐんざうづれ。取とに足あらざる意趣いそを以もつて。場
所しよをさらはず御手討ごてうたうになされんとは。エ、是非せひもなき。御所存ごしよこんじやよな。殊更ことさらラ御分地大道寺美作御親ごみやくごしん子こ。夫おとこに付添ついで。佞
人原ねいじんげん。事ことがなあらば家国けいこくをも奪うばはん企こころ。此頃このころは学まな太郎たろう廓かへ入い込こみ。若殿御寵愛わくでんごちゆうあい(十ウ)の三国さんごくをくとくと承うけはり。合点行あつてんぎやうすと
窺うかがひしに。案あんに違ちがはずまつ其そのごとく御身ごみを怒いからせ過あやませ。夫おとこを云い立追しりぞい退ひんとの工たくみみ。その所ところへ御心ごこころの付つざるか。
一人たんれいなれば一ツ国乱いくなみの基もと。御身ごみを忘れ此行跡このこゝろ。向後けうごふつ〜。思おもひ切き此義このぎとゞまり給たまはらば。兄君あにぎみは申まをに及およばず。
一ツ家中いっしやうちゆうの悦よろこび。御聞ごみキ届いたり下くだされと怒いかり有あつ唐橋たうきやうが。誠心まことこころ尽つくす諫言かんげんは人ひとの中ちゆうなる。人ひと也なりけり。
采女さいにょ之介のすけにちゆうふくし。あやまつて改あらむるに憚おそりなき聖賢せいけんの教おしへ。先まづ刻ときより諫言かんげん采女さいにょ之介のすけ聞き届いたりた。今いまこそ誠まことに心こころを改あらめ。三国さんごく
が事は思おもひ切きル。武士ぶしの詞ことばに二言ふたごなし。安堵あんたせよ唐橋たうきやう。ハア、有あがたし忝かたじけなし。拙者しやくしやごときの御諫言ごかんげん御聞ごみ入い下くだされしは。(十

一オ)冥加地ハルに余る仕合せと土スエに頭を摺中付れば。ヲ、其方か志こころざし過分フシシなぞや唐橋。定平供せよいざ帰らんと立給ふを。暫色しとどめ。其御一言詞に相違もあらじ。イヤナ二定平。若殿様にも今宵くわんばは廓なごりの御名残。其方付添地ハルイ御大切に心を付。茶屋方にて御酒一献。ハア委細かしこま畏かしこまりましてござります。若殿様。返すくも御短慮なく。御帰館願ひ奉ると。いふも心に一思案忠義にかたき。唐橋ウが引地ハルわかれてぞ三重へ行も又。

爰地ニ上リ歌寄ハルは吉原中の町の夜。桜花にうかれて曲輪カハルへ通ひ。格子覗かうしのぞけば嬉しやしんぞ。招く禿が相図の手管くだ。忍び逢夜ウの其樂しみは千代もかはらじかはらじな。諷ナラスふ唱地ハル哥フシに。間押トルへさへつ。さ、(十一ウ)れつ盃ハルの。さゆる座敷も浮立ぬ。采女地ウか済すまぬ顔色を。いさめる亭主ていしゅ又六か。コレハ又どふでござります。やまたの大蛇おろちに取巻れた。稲田姫見る様に。去り逆はめいります。マアく一つお上りなされませ。イヤく酒は呑のまぬ。置てもく。ハ、ア扱はお氣の浮カぬのは。おいらんのお出がない故。併シ三国様も此間は。学太郎様の揚詰あけつめ。殊にアノ学太郎様は大の愷りんき氣きじやの大やき餅。揚の内は女房じやと。三国様の傍そば一寸も放はなれずでござります。ヲ、ソレくあんなお客を勤るも。いやな事ではないかいなど。口々くちくち譏ぞしる其中ちゆうしんへ。出る軍蔵千鳥足。亭主ていしゅく。又六く。女夫ながら爰へ来て。身共は構はず何(十二オ)かこりや。采女殿計が客で。身共は客でないか。屋敷でこそ倍臣はいしんの本家のと別れても有ふずれ。廓では一蓮謔生。それに何ぞや。いけもせぬ若殿風。うぬが逢あい方の女郎を人を取られ。せふ事なしの一人酒。金のないのは不便な物だ。エ、まじくとしたしやつつらだと。いふに采女地色ウせき立顔色。定平透ウさず立寄すかて。軍蔵を投なげ付れば。髻ハルを取とてくつと引よせ。某詞をさみしたる落首くわくしゅの短冊。殊更今の悪口雜言。今一度云て見よと。にじり付られ手を合せ。ア申くマアく待て下さりませ。其短冊は学太郎様や官兵衛めが。往生つく

めに筆取たは。私は誤り。命計はお助け(十二ウ)と。あられの様な涙を流し。這廻るこそ見苦しき。エ、娑婆ふさげの畜生め。手討にするも刀ナの穢れ。犬侍の成敗はまつかうと。眉間を鏢にて打破られ。ワット一声身をもたへ。苦しむ所を定平が。下緒手早く後手に。桜が本へくゝる内。采女は用意の短冊に。返哥の落首とさらく。定平取て打詠。大道寺いかんで読は横道の。苗字にもれぬ恥を学太郎。ハ、ハ、ハ、コリヤ若殿出来ました。是を肴に奥の間で。御酒一献。召上られよと主従が。打連奥に入れる。

始終小かげに窺ふ唐橋。ずつと寄ていましめ解。辺りを見廻し。料理人の作右衛門大義く。そちが働きを以て。若殿に(十三才)も別ツ条なく。成ル程。あなた様のお頼みの通り。軍蔵に面体恰好似たるを幸イ。若殿様を偽り此疵を請た故。御立腹も納り。お目出たふござります。イヤモ身が満足此上なし。ガ見付られては事の妨ケ。礼は緩りと帰宅の後。当座の褒美金五両。ア、勿体ない何のお礼。左様ならば唐橋様。おさらば。さらばと引別れ奥と口とへ立て行。

入相の。鐘の響きも。余所に聞。物云フ花の色揃へ。浮ぬ三国が。八文字。跡に続いて学大尽。番頭と仲居が取巻て。入来る茶屋の大騒ぎ。イヤナニ若殿。三国殿の全盛は。かう見た所が花も及はぬ月の丸顔。さへぐと雪の肌より黄金の。光りで浮む千両箱。お差図(十三ウ)の通勝手迄。取寄ましてござりますソレ又六。早く。心へ亭主か勝手より。か、へ出たる千両箱。座敷へどつさり。イヤもふ学太郎様の白鼠。忠義一疋受ております。ア、コリヤく亭主。其様にのぼしてくれないやい。其白鼠も若旦那の黒鼠にはこまつた物だて。何といふ。此学太郎を黒鼠とは。ム、大適といふ事か。コリヤ出かした。よく見立た大夫一の慰みに。見立尽で其金を。手摺次第に取せいく。こいつはごうぎたく。まつ先陣に官

兵衛が。金箱の蓋をこつちへかう取て。裸小判の摺取。めい／＼見立て取たりな。アイと仲居か取上る。小判と小判をやり違へ。鷹の羽の紋とはどふじやいなア。コリヤ又し(十四オ)こいゑらしこい。禿のもじ野が傍に寄。私もつむりへかう上て。二枚櫛とはどふじやいなア。これはもじ野があじやつた。次キはやり手が五六両。片手に広げたためくり札。よい手上たはどふて有。夫レは只今法度なり。跡は亭主が思ひ付。こいつをくるりところ並べ。角力の土俵はどふて有。夫レではよつ程墓がいた。こつちも透さず此利八。両手に小判をこふ摺み。抜参りとはどふて有。ヤイ／＼そんな事して参つたら。爰に居る仲居のおよしの様に道で馬に噛れふぞよ。エ、縁義の悪い。したが是程有たら。馬所か天狗に摺まれても大事ござりませぬ。去とはゑらいお好様。しつこい(十四ウ)けれ共又六か。此二両をばやりちがへ。ソリヤ鷹の羽か古いぞや。そんなら是も取て置。最一つ土俵のくりかへし。けん角力とはどふて有。夫レもやつはり古い也。そんなら是も取て置。片手に小判八九両。めぐりかるたはどふ有ふ。去とは古いゑら古い。古けりやいつそ新しう。三色の見立をこふ寄て。一つに受納はどふて有。イヤ／＼／＼ソリヤ成ぬ／＼。成ずばかはつて学太郎が亭主／＼に智慧かそかく。残つた金を引よせて。はらり／＼とまきちらし。土器投とはとふて有。コリヤ又ごうせい／＼と。のぼせば上る山吹の。花吹ちらす。大座敷。わしは三両私シは五両。是が夢なら覚なよと。拾ひ染る心は(十五オ)夢中。詞と三国。大道寺学太郎共云る、武士が。恋なればこそ花見遊山と。多くの金銀遣い捨る身共が心底。少は推量仕給へと。しなたれか、れば。こなたの間。見かはす采女が顔と顔。悪い／＼と目でしらす。夫レと見て取学太郎。蓼喰う虫も好キ々と。人の揚て置大夫を盗み喰ひ仕あるく。猫大名にうつ惚て。心中立が胸が悪い。人の喰余りを盗たがる。のら猫武士の犬大名と。采女之助に当付る。口へ出俵の悪口

雑言。こらへくし采女之助。障子押明走出。最前から聞て居れば。犬侍の猫大名のと。聞キ捨られぬ一子部始終。猫大名の訊聞ふ。サ、今一言承らふと。氣のせく顔の青暈。擲キ立（十五ウ）てそ詰寄ば。成程そふお聞なざるれば。お腹立は御尤なれ共。手前に置いてあしく申さふ様かござらぬ。併しながらお氣にさはらはいか様共なされたかよい。サアお切なされ。サア切つしやい。サアくくと突付る。三国は中へ押わつて。コレ殿様必短氣起して下さんすな。私可愛と思ふてなら。堪忍して下さんせと。抱付たるはらく涙。隈なき月に春雨の。晴間泣入傾城の。真実見へて頼もしし。

学太郎空うそふき。拙者か猫大名と申たは。御自分の事ではない。人の揚て置大夫をねがけ。理不尽に遊興の座敷へ踏込やつを。犬猫と申たのでござる。何と官兵衛。誰やらのお顔をよく見よ。猫に（十六オ）似か、つて有ぞよ左様でござります。病犬に生キうつしと。云れて胸も張さくる。憂を三国が志。瀬左衛門が一言迄。思ひ出せし切刃際こぼす涙の縁頭。柄も碎くる計也。

官兵衛は嘲笑ひ。ハ、ハ、ハ、何と学太郎様。アレ御らふじませ。女猫と男猫が泣まする。何とよいさまではござらぬか。盗喰ひの成敗は。官兵衛か仕らんと。采女か首筋取て引すへ。手に合俵の責せつてう。傍に三国が千万無量。何と障子のこなたより。欠出る唐橋瀬左衛門。かくと見るより官兵衛を。引つかんで投付れば。コリヤ叶ハぬと逃て行。ヤア倍臣の瀬左衛門。何故に狼藉する。ホ、こなたに狼藉するは。端大名か本（十六ウ）家の若殿を打擲致す様な物聊古への功有は辻赦し置は付上り嗅イ者身知ずとやらはしさへ有ば鳥だと思ふ。蝙蝠侍の盗賊大名。何と若殿いちらしい物ではござりませぬか。たまれ瀬左衛門。わりや学太郎を盗賊と云つたぞよ。いかにも盗賊先年金閣造営の折から。五千両の紛失。御金役人の誤り

と成。切腹致し相果たる。末期の一句に少しも違はず。此程より費さるゝ。金子を残らず改メ見るに。疑もなき金役の極印。紛失の五千両。は見られよと。以前の小判取出し。学太郎が目先に突付。サ、御返答承らんと。しつべいがへしの詞詰。証拠取れて言句も出ず。もふ是(十七才)迄と切かくる。家武者の学太郎唐橋透さず。拔身たぐつて刀のむね打。りうくはつしと打すれば。肩で息する計也。

采女も小気味余念なく。大夫アノぞま見やいのふ。是で胸がさつぱりしたと。ひつたり抱付ク見せ付ケは。恋の意地とぞ見へにける。

瀬左衛門も心地よく。サア若殿。是から奥でお酒盛。蝙蝠様。後程御目にかゝりませふと。忠に其身を捨詞。しらけた座並持直す采女に付添奥座敷。皆々引連入跡に。

残る意恨は学太郎官兵衛か立出て。イヤコレ若殿。瀬左衛門めが悪口雑言。嘸御無念にござりませふ。拙者め土手に待合せ。帰る所を真二つに。コリヤ。声が高い。中く(十七ウ)汝か手に合唐橋ではない。鬱憤晴すは帰国の後。何事も身か胸に有。官兵衛来やれと打連て。無念を隠し立出る。目先に落ちる以前の短冊。きつと詠て。大道寺いがんでよめば横道の。苗字にもれぬ恥を学太郎。手跡は采女と見かへる一間。うつる火影は傾城と。采女か中の睦しさ。胸の炎のきへやらぬ。無念の涙操返す。廓を跡に学太郎帰る。心そ三重へあやもなき

第三

日本堤の賑ひは昼夜分たぬ人群中。戻るぞめきに行そ、り。侍舌に町田舎。丸頭はこつそりと。顔を隠すや江戸頭巾。大門

口迄昇込す。二榎三榎五丁町。土手八丁の（十八オ）水茶屋も。名深くと目印の行燈の。光り輝きて昼と疑ふ計也。コリヤく亭主。もふ帰れく。ハイく左様ならはお暇申ます。明晩はきつとお待申ます。イヤナニ官様。彼めがきつうこつておりますぞへ。エ、爰な色男め。よふいらつしやりましたと折介にも。小腰か、める上手者別れてこそは帰りける。跡先見廻し学太郎。イヤナニ官兵衛。此度献上の三品の宝。術を以て奪ひ取。それを越度に早枝家を断絶させ。時を待て我手より差上る物ならば。多賀の跡目は則某。其時に采女を始メ瀬左衛門めも仕廻ふて取か。何卒。宝を奪ひ取手段や有か。成程く夫レは急々大殿の差図によつて。軍（十八ウ）藏に申付ござれば。近々吉左右お聞かせ申さん。出かしたく。今一品は瀬左衛門めが預かる由。是は帰国後仕様も有ん。官兵衛。来れと引連て。館をさして立帰る。

うら山し。土手の野風も今は早。身にしむ思ひ田代孫市。こなたも同じ浪人風互に行合顔と顔。こなたは梅原徳太夫殿。あなたは田代孫市様。ヤレくお珍らしや。私も唐橋様を追出され。夫レより方々と主取を致しても。又しては浪人を致すも生れ付てのカノ得手物の手転業故しくぢり多く。夫からゆすり。街事。イヤモ何をしても埒明ず。此年迄難義致すも心から。とんと此身にうんじ果。向後心を入かへます。どふぞ古主（十九オ）の唐橋様へ。お取成下さらば。古傍輩のよしみ有難キ仕合と思ひ入て頼むにぞ。こなたも今更恥しく。面目なげに顔を上。イヤモそふ頼まる、上からは何をか包まん。某も風与誘はれての廓通ひ。度々御用をかきし身の越度。勘気を請て此風体。何卒帰參を願はんと思へ共。屋敷へは足踏ならず。今宵爰迄来りしも。瀬左衛門様やうす有て廓へお越と聞し故。途中ながらも御訴詔を。願ふて叶はぬ其時は。生甲斐もなき此命。推量有と計にて打しほるれば徳太夫。砂打払ひ立上り。何の事じや。行先々が皆へこまん。役にも立ぬ長

談義近頃御苦勞千万。ハレヤレ（十九ウ）大きに隙費へと愛相もなげに急ぎ行。

孫市はにつくきやつと思へど取にたらざる愚人。只御主人のお帰りの。遅きはいかゞとつ置つ。廓の方へ尋行。夜も早更中。人絶の透を窺ひ軍蔵は。徳太夫を伴ひ出。今も咄す通り柴船の花生。是を奪ひ呉しなば恩賞は望次第。大名にも取立呉んと主人のお頼。よふござります。仕負せたら大名。しくぢつたら命がけ。コリヤよつ程の大仕事。先当分の印でも有そふな物。ヲ、さいふにや及ぶ頼の印と金十両差出せは。コリヤ有難い拍子まんが直つて来たはい。祝ひ事に吞かけふ。コリヤよからふ。身共も同道。イザ来やれいと歩む向ふへ（二十オ）挑燈の。火影見付て立留り。アノ紋所は瀬左衛門。きやつをばらさは又御褒美。ヲツト吞込不敵者。尻引からげ懸かぶり身拵へして兩人が侍共知ず唐橋は。歩来かゝる夜の道。家來が燈す灯燈の紋も心もおとなしき。印は丸に一文字。行過させて左右より只一討と切かくるを。引はづして突退る又打かくるをかいくり。腕首取てかづき投。こは叶はじと逃行兩人。遁しはせじと唐橋が跡を。したふて三重へ行空の

第四

わしが心は萩のうは風さはくいへど。かはくひまなき尾花が袂。さつてもつれ（二十ウ）ない女郎花。君が思ひは萩の下露つゝ濡初て。今は重なる。月草の。さつても悪性な男べし。かはり安きは草の色。青々海に。打続く。爰は野守のかぐみ山。麓の野辺に生茂る牛の飼料駒かへる。まだひこはへのつまみ髪。里の童が打つどひかたみに。刈て押詰る。

鎌の手やめて何と長松。けふも草刈て仕廻ふたら。又角力取ふぞよ。ヲ、巳之助。きのふの勝負わがみと取。といへば兵太が。ヲ、おれも虎吉に負たが口惜い。何でも勝負取にやならぬと。聞て虎吉気丈者。何時でも相手は嫌はぬ拾ひ投じやぞ。

エ、一番勝たと思ふて（二十一オ） 蹶けたが過るぞよ。大きな事いふたらすこはり廻すそよ。ヲ、はらるゝならはつて見い。ヲ、はつて見せふと惣々が。寄と喧嘩のわやく盛り。打てかゝるを虎吉が負ず劣ぬ気かざ者。三人四人が上を下起つ転んぶころくく。草刈童の喧嘩連草をむしるがごとく也。

後の方より年倍な。是も同じ草刈姿。マアく待んせくと分入は長松が。わりや誰じや。イヤわしは此近在の者シじやが。おば様の所へ遊びに来て居る故。皆と連立て草刈ふと思ふて跡から来たが。銘々草はからず喧嘩して居て済物か。わしが挨拶する程に。もふく是から中よふといへば皆々口揃へ。そんなら（二十一ウ）もふ喧嘩は止にして。草からふでは有まいかと。追わらべの根葉もなき鎌の手品のやさしくも。君を思ひに。通ふ小車百夜草。いつかは落ん草枕。調ひ連つ、余念なき。

仕事半へのつさく。大道寺か家来平野官兵衛。ヤイく小朥めら。今日は此辺にて御主人のお鷹狩。うぬらが爰で草を刈故小鳥か一疋もおりぬ。きりく脇へうせおらふと。横柄頼にきめ付れば。何のぐはんぜもアイく。そんなら脇へ行ませふ。サア皆こいく。爰らに居て呵れふより。向ふの山の原へいこ。よかるくと草刈共。実正直の道すぐに。とびくごまめ。はしり事して急き行。

跡に官兵衛ヤイ（二十二オ） わつばめ。うぬも一所に早くうせふ。イヤ申お侍様。お前の御主人のお名はなんと申ます。ヤアこいつさまぐの事を尋る。身が御主人はナ大道寺学太郎様じやはい。エ、そりや御分国七万石の殿様。此所は又早枝大領時元卿の御領内。学太郎様の御領地なら。我俣をおつしやつても承ハつて居ませふが。他領で理不尽は成ますまい。ヤ

ナニカ何とイヤサ夫レは。サアお鷹野かなされたくば。あなたの領地でなされたがよふござります。夫レに何ぞや権柄らしう。目をむいて子供を呵る。とほうもないお侍。嗜しやんせとやり込れば。ヤ憎いわつばめといふては見たが理の当然。(二十二ウ) あたりましくしまじめ顔。

折からこなたの松か枝の小鳥見付飛くる鷹。いかゞはしけん鷹の経絡枝にか、つて放れ得ず。もがけば猶もまとい付。南無三宝と官兵衛があせる向ふへ松浦軍蔵。大勢引連欠来り鷹を尋るうろく眼。アレ見られよ軍蔵殿。御秘蔵の小霞松がへに経絡かか、つてアレ。くく誠にあの仮置は命がない。ヤアく者共。此松へ登つて鷹を助ヶよ早くく。ア、イヤ其義は御免下さりませ。この大木の上迄登る毛爪はなし。踏はづしたら体はみぢん。ヤレ醜しやく。エ、ごくにも立ぬやつ原。いかゞはせんとあせれ共。詮方もなく見へければ。コレサ軍蔵殿共を(二十三オ) 大勢呼と寄。此大木を切すが能ござらふ。いか様マこりや御尤。ヤイく家来共。此村の柚共を一人も残らず連て参れ。畏つたと欠行を。ア、申く御家来衆。マアくお待なされませと。とむる草刈官兵衛せき立。ヤイく何をうぬが知た事。すつ込でおらふわつばめと。睨付れどちつ共恐れず。惣体田畑の脇に大木を置は大風を除ん為。纒の鷹を助ん連アノ木を切ば。百性の大きな迷惑。譬柚が大勢か、つても。中々半時や一時では切まずまい。隙取内に身をもがき。鷹は死で仕廻ます。スリヤ何のせんない事。無益の御思案なさる、故。お止メ(二十三ウ) 申のでござりますと弁舌淀まず云い込しは只者ならず。見へにける。ハテ小盼に似合ぬ小むつかしいやつ。こいつ何者でござる。イヤ当村の土民の悴。ヤイわつばめ無益とぬかすおどほねで。鷹を助る工夫が有か。ハテ知れた事鷹の脚皮射切て仕廻ば。何の子細もない事。お望みならば其弓矢。おかしなされて下され

と。立^{地ハル}派の一言^色面白い。土^詞ほぜりの分際^色で。見事脚皮射切かよ。ハテ好んで致す此はれ業。鷹を助けてお目につけふ。然^{地ウ}らば見物致さふと。弓^{ハル}矢渡せ請取て。きりくくと引^中しほり。切て放せばあやまたず鷹の脚皮ふつと射切。(二十四才)
鷹は放れて羽た、きしいづく共なく飛失たり。なむ三宝お鷹がそれたと。口^{地ウ}々いへは官兵衛軍蔵。其^色わつばめに縄^{なわ}打と。下部
に大勢立か、れば飛しさつてア、申^色くこりや何となされます。ヤア鷹の命は助ても。取逃^逃したはうぬが誤^{あやま}り。こま言いはすと縄か、れと。おとなげなくも大勢が子供^{ひとり}独を追取卷廻し。既^{フシ}に危^{あやう}く見へにける。ヤア^詞く皆の者暫^ク待テと。大道^{地ウ}

寺学太郎。鷹匠^{ハルシヤウ}犬引^{したが}随へて。悠々^{やうく}と床几にか、れば皆々。敬^ウひ恐れ入。

学^{地ウ}太郎が笑^中ひ。最前^詞より物陰にて窺^ひしに。童^{わづは}一人を大勢にて追取廻し。逃^{なま}さぬやらぬ杯とは大馬鹿^めら。ヤナニ(二十四ウ)童^{わづは}。扱^{さいち}々才智といひ手練と云。ホ、ういやつく。われ土民の悴とは偽^り。何者の悴成ぞ。と仰^{地ウ}にハツト恐^色れ入。

ハア、御錠の通り。誠は磯松新五右衛門が駁。新次郎と申者。ム、其又新次郎が。姿^{すがた}をかへし子細は何故。エ、情^{なさけ}なき若殿様。お傍に付添^{ねむ}倭人共^まに迷はせ給ひ。や、もすれば御手討と。様^{さま}マ々あしき御行跡^{ふるまひ}。剩他領へ出て御鷹野田^{しほの}畑^{かみ}を踏^ふあらし。所の騒^{さわ}も顧^{かへり}給はざる非義非道。既^に以つて官兵衛軍蔵杯。御秘蔵の鷹とは申ながら。耕作の助^{すけ}とする樹木^{じゆもく}を切^きんなんど、。家来の越度も主人の御身にかゝる時は。悪将と云ん人^{しん}口を口惜と思し召は早く倭人を遠^{とほ}ざけ給ひ。行跡^{げうせき}正しき御身持。恐^{おそ}しながら願^{ねが}ひ(二十五才)上奉る。親新五右衛門に成かはり。御諫言申上る拙^{ちつ}者が心底。御聞届^{きこ}ケも有ならば一家中に申に及^{およ}ばず。下万民の悦びと身^みも謙^{かた}る諫言は。忠^{ちゅう}と孝との二筋に立る詞の迷さ。道家^{だう}老の息子也。軍蔵^{ぐんざう}官兵衛むくりをにやし。ヤアあくちも切^きれぬ願^{ねが}ひたより。我々を倭人杯と。今一言ほざいて見よと。反打^{へん}て詰^つかくる。二人^{ふにん}を制^{せい}して学^色太郎。

扱詞は家老磯松が駁詞にて有しよな。ホ、若年にして某へ諫言とはういやつ出かしたく。其方が志にめで。けふの鷹狩は是限。直詞ク様マ館へ立帰らん。新次郎は先へ帰り。新五右衛門に安堵えんどさせよ。早行ちゆうくくと手の裏うらを打て返せし。御気色ウ。エ、(二十五ウ)有がたい御仰然地ウらばお先へお暇と。二人を尻目しりに睨付館フシへこそは立帰る。

跡地ウに兩人溜息たぬいき吐息こイヤナ二若殿。是迄御異見致す者は直詞ク様お手討。新五右衛門が駁一人。其俣お帰しなされしは。御所存有やと尋れば。ホ、そちが不審は尤。磯松新五右衛門。駁を土民に仕立。狼籍ろうせきさせて短慮たんりよを起させ手討になさば。他領において土民を討しと。夫レを越度に某を座敷牢ちゆう杯に押込。身動みぶキさせぬ謀。駁めも一命を捨。我を諫めん頼魂。そこを悟つて此方より。聞届し体にもてなし。此場を無事に帰せしは。裏地色ウのうら行身ちりやくが智略ちりやくと。聞て兩人横手へいを打。ハア、適妙計。御頓とん(二十六オ)智とそやし立たる同腹中。こなたの方より以前の童。何かいさかふやんちや声。其鳥こつちへ。いや成ぬと鷹ウ互たかいに引ばり出。中ウにも年倍はい甚こ之助。此鳥はこちの田へおりたからはおれがのじや。イヤくなんぼ庄屋の息子でも。我俣は云さぬと争地ウふ拍子引拍子鷹を左右へ引さいたり。さしもの官兵衛へい恠こりし。ヤアコリヤ是御秘藏のお鷹を引さいた。といふ事あかせず学太郎刀拔手も見せばこそ。甚ハル之介あまが骸かみより肩骨かけて突通せば。狼籍騒ぐ草刈共。ソリヤ切たくと皆ちりく。軍蔵地ハル官兵衛地色顔。他領詞において切ッ害とは。不審御行跡いふかしき只今殿の仰られし。お詞とは(二十六ウ)大きに相違。定し御前の御所存はし。有ての義でござりますかな。ホウ今聞所此童わはめ。此所の庄屋が小駁。別当所は意恨いこん有。瀬左衛門めが支配と聞。此死骸を以テ役所へ押そかけ。瀬左衛門を仕廻て取。其計略けいりやくは道々語らん。者共。来れ地ウと先ハルに立陣屋へ。こそはへ急三重き行

第五

江州多賀の領分。唐橋瀬左衛門が支配所に地頭屋敷一ト構へ。見越シの松も君が代が目度武功高堀の。守り厳敷見へにけり。瀬左衛門立出聞耳立。ハテ合点行ぬアノ太鞍。ヤアく弥藤次。村方に騒動有ルと覚るぞ。ソレ万一狼籍者ならば繩(二十七才)打て召連来られよ。ハア畏つたと弥藤次は。下部引連急ぎ行。

横悪天の憎ムといへ共月日のゆとり有ぞ共。知ラぬ非道の学太郎。軍蔵引連入来れば。瀬左衛門出迎イ。コレハく学太郎様。思いも寄ぬ御来臨。いざ先あれへと請ずれば。物をもしはず打通る。軍蔵声かけ。ヤアく者共。ソレ童めが死骸早く。

く家に来共。空しき死骸を戸板に乗。死たる鷹も諸共に。白州に直し引下る。唐橋殿。其死骸見さつしやれと。頬で教へる横柄無礼。かまわず死がいをとつくと改。コリヤ是。当村の庄屋甚右衛門が悴。ム、スリヤ此おさなき者を殺シたる狼籍

者は。瀬左衛門。おれだ。当所はそちが支配(二十七ウ)でないか。百性共に申付無礼のない様になぜ致さぬ。さつする所村方と一つに成。某シの秘蔵の鷹を害せしに違ひは有まい。甚右衛門とやらを始。其場を逃帰つた草刈のわつば共。残らず我目通りへ早く出せ。一々首を並べてくれんと。せきにせき立怒りの大音。唐橋はハツと差うつむき。返答なければ。コレサ瀬左衛門。狼籍者は此悴。御秘蔵の小霞といふ鷹を草刈童がせり合。此ごとく引さいた。夫レ故のお手討さ。夫レに又主人の御意を返答もなく。思案の召るは不承知か。よいく。此上は軍蔵が手をおろして。草刈共一々首引さげうか。何と。くと詰かくる。(二十八才)折からすたく息切ッて。走り来るは庄屋甚右衛門。申。お代官様。甚之介が切れたとは。そりや真実か。誠でござりまするか。悴はどこにと見廻す目先。かはり果たる我子の死がい。ヤア甚之介かいやい。寝

て居るのじやないかヨ。そんならやつぱり切れたか。ハア、。可愛地ハルやとしがみ付スエテ訳も涙に。くれ居中たる。

氣を取直地ハルしコレ申。お代官様。悴詞甚之介は。ナニ何者が殺しました。定メてあなたは御存詞じで有。サ、早ふ云て下さりませ。敵が討たふござりませ、おつしやつて下さりませ。情じや。おじひじや。何やつじや。どいつでござるとせき立詞ば。

ヤア姦かしましいだまりおらふ。其死がいを悴詞とぬかせば。扱詞は(二十八ウ) 儕おのれが甚右衛門。縛しほり首討腕廻うそせと。云地ハルはれて恠り。マ、何の事じや。とんと訳が分からぬはいの。悴を殺され其上に。親迄縛り首とは何の科。サ、何誤地ハルまりでと這寄はつを。

学ウ太郎はつたとぬめ付。コリヤうづ虫能聞。某が秘藏の鷹。そちが悴に此ごとく。引詞さかれし故ぶち放はなした。儕ともも俱ともにぶち放す。それへ直れ。そんなら悴はこなたが切たの。ヨ、サ。うぬも一所にくたぱりおらふ。イ、やくたはるまいわいの。儕地ハルこそ悴が敵と。掴地ハルみ付んと欠寄をイヤ慮りしくわい外なやつ。すざりおらふときめ付れど。聞地ウ入もせず欠上るを瀬左衛

門引色と、め。コリヤ待。イヤ、お放し下されませ。ハテ扱詞。(二十九才) 待と云ば先ッ待。コリヤ甚右衛門。御前を誰地ウレと

か思ふ。当国の御家門大道寺学太郎様。悴が敵といふてそち達が。指さしも成うろたへふか狼籍者。イエ、。譬詞学太郎殿で有ふが。殿様で有ふが。身にも命にもかへぬ。大事の。悴の敵。あいつをくたばらさねば置地ハルませぬと立上るをしつかとと、

め聞分色ケなし甚右衛門。あなたを悴が敵といふて。ソレさすが一本持もせず。何をもつて本意を遂とぐる。不便そくざや即座にお手にか、り。ナソレ其方が命がないぞよ。コリヤサ心を付よと和せうらかに。いひ聞せてもひるまばこそ。ハイ。かういふからは

お手討合かてん点。殺されるも得心じや。殿様の御一家。(二十九ウ) 学太郎殿を相手。譬たど刃物をすつ百本持た迎むかひませふ。悴が殺されたと聞き儕レやれ。悴が敵取いで置ふかと。氣違いの様に成ッてお先まつくら。殿様で有ふが。一家で有

ふが。こいつが。どいつが。むちやくちやくでござりますわいの。敵は学太郎殿とはしらず。母者人や嘸に。コリヤ何にも泣事はない。万一悴が殺されたが定ならば。おじひ深いお代官様を頼。其殺したやつを引とらへ。つかみ付て成共敵を取て戻る程に。案じずと待ておれと。力を付て来て見ればハア悲しや。敵は殿様の御一門。所詮どふも敵は討れず。悴めは切れ損じや。諦は(三十才)と母者人やか、に。是がマア。何と帰つて云れませふくぞいのふ。小刀一本持ず。つつかゝるのは。一ト刀に殺さるゝ、覚悟でござります。コレ学太郎殿め。よたけもないあの悴を。よふもくむごたらしう切やつたの。イヤ殺しやつたの。サア。おれも次手に殺さしやれ。切しやれ。サア切レ。人の恨ミがない物か有物か。よふ覚て居やつしやれと。たくしかけたる恨泣。こぼす涙は秋雨に又秋雨を添にけり。夫の遅さ待兼て走り。つまづく女房お町。うろくきよろく白洲の内。コレこちの人。甚之介はどふ成ました。ば、様が孫はどふした。くと泣てばつかり。ヲ、か、か。ウハア。コレく甚之介はどふ(三十才)成ました。アノく悴はな。どふ成ました。ヲ、学太郎殿の手にかゝり。殺されたはいやい。エ、そりや定か。ヲ、死がいはソレそこにといふにかけ寄いだき付。コレく甚之介く。物いふてくれ。か、じやはいの。く。夕部迄もけさ迄も。遊びに計身を入れて。コレく手習せぬかと呼付てしかるまい物可愛やと。空しき死がいに取付て最後。ふかくに取乱す。

可哀やと。空しき死がいに取付て最後。ふかくに取乱す。

哀を知ラぬ覚太郎。うづ虫共が泣は。く。夫レで泣仕廻か。先刻より某に向ふて雑言過言。望ミに任せ討放さんと。刀引さげ立かゝるを押隔ヤコレ。おせきなさるな。なぜ留る。身不肖なれ共唐橋瀬左衛門。早枝時元卿の御目(三十一才)かねを以て。一郡の支配仕れば。政道に私なし。元の起りは今日の鷹狩。御一門とは申ながら他領の事。此方へお届有ば。

ぶ札なき様に取計ひ仕れ共。一ツ向に御さたなき故。御一門とは存ぜぬ筈。殊に幼少なる者なれば鷹を争ひお手討に成し上は。最早御憤りは晴る道理。譬御本家。又外々の大身でも。鳥類のかはりに人シ命を断は。中々憎き事にあらず。申さば殿様同然の御前シ故。事隱便に取計ふ拙者を差置。我俣の行跡。夫レ共。達ッて彼を討タんと有ば。時元卿へ申上。御大法の通計ラはん。サアく何と、詰かくる。ヤア聞たくもないよまい言。本家の指図を受大法に行(三十一ウ)はんとは。身を狼籍といはぬ計り狼籍ならば狼籍次手。そちも一所に手討の相伴。覚悟致せと切かくる。利腕取て突飛ば。透をうかぶ軍蔵か。打てかゝるを真の当。うんと掾より真逆様。いらつて切り込刀の下。身をかはして懐中より。手早ク一軸取出し。刀はつしと打落し直クに引寄くく。ヤア手向ひか瀬左衛門。イヤ手向イは仕らん。コリヤは御先祖の御異見。此一軸は代々伝はる菅家の正筆。御先祖菅公の御怒り強く。非道のこなたをやまつかうく。サア身動きならば動かかれよと。又丁くと打すゆれば。白洲に夫婦か小踊し。エ、忝い。コレ。くか、も悦とや。ヲ、嬉しい。くこちの人と。悦ぶ事は限りなし。(三十二オ)ヤ是でちつと腹か居た。コレくこちの人せめて齒形の入程成共。喰付て甚之介が恨。ヲ、そふじや。くと夫婦諸共立かゝるを。コリヤ甚右衛門聊爾すな。少にても御前に疵付れば。従類を絶さるゝ。扣へて居よ。サ扣へておれ。エ、情なや学太郎様。わづかの誤りを云イ立。アレ稚き者を手討になし。其親を始め一族の愁揚いか計と思し召。既に唐土にも罪なき者を害せしかば。三ヶ年が間早魃すと後代のいましめ。桀紂に等しき悪ク逆御先祖の御怒り強く。瀬左衛門が腕を借りての御諫言ヤこたへたか学太郎様。但シ御不承知の趣なれば諸人の歎きにかへかたし。恐しな(三十二ウ)から剣げきを以て御命を申受。腹かつさはく瀬左衛門が魂。サア有無の御返答。くと忠義にこつたる

唐橋は。実も和国の比岸也。

横がみ破りの学太郎。道理に刃向ふ刃なく誤。入し風情にて先非を。悔る計也。

面目なげに顔ふり上。我。家老共か数度の諫言。一ツ向に用ひぬ某なれ共。今といふ今五臓を貫き。心魂にこたへたる瀬左衛門か異見。ヲ、よくも打擲致したり。其方が打擲は我非道をため直す。先祖菅公の御怒と思へば中々。恥しからず。却

て今日より本心に立返る。学太郎が身の大慶。ヲ、過分なぞよ瀬左衛門と。打てかはりし一云に。スリヤ只今の拙者が諫言。

御聞キ届下されふとな。ヲ、疑はしくば弓矢神。正八幡を誓ひにかけ。又先祖菅家の御(三十三才)罰を蒙。立所に雷に

打れて相果ん。ハツア御本心にお成なさるれば一家の悦び。我々ごときの諫言を御用ひ有は。ヲ、遣は学太郎様。と

は申ながら。美作の若殿を。勿体なくも打擲致せし拙者が罪。譬いか程打れても。本心に立返る。我身の為の武神同然。

ハア、勿体ない事御意遊ばすな。イヤ礼は某。お詫は拙者。何詫言。ハイヤ有がたい学太郎様。ヲ、過分なぞよ瀬左衛

門。ヤコレハく恐入。

や、有て学太郎夫婦に向ひ。ア是に付ても不便なは最前の小児。ナニ甚右衛門夫婦。思ひもよらぬ悴を殺され。憤り尤至

極ナニ妻。女義の事成。取分ケ其方は腹が立ふ。ホ、口惜かるふ。今此場にて甚之介が敵。首さし延て討れてくれたい物な

れど。今聞通り学太郎が(三十三才)本心に立返れば。一国の悦びと有。左程に重き我身共。心付ざる非義非道。無誠敗に

人を損ひしを。今更悔にかひもなし。そち逆も愛子を殺され。ほいなふも思はふか。国の為じやと諦めてコレ了簡

頼ムコレサ夫婦の者と両手をつき。真実見へし詫涙。張合拔し甚右衛門。居住居直すも。おづうちうち。是はマア

甚右衛門心付。ハ、コレか、わがみの相伴又泣て退ました。ドレ爰に居る程何やかや思ひ出す。悴が死がいを申受。内へ帰つて母者人に見せたらば。嘸悦ぶでござりませふ。か、悦びや。サア甚之介よ。と、が抱て連ていのと。いだき上れば瀬左衛門。懐中より金取出し。其方達が了簡は。学太郎様の身の納り。左少なれ共甚之介が。野べの営み香篋と。渡せは取て押戴。御辞退申さす請ます。イヤ申瀬左衛門様。学太郎様。もふお暇申ますると我子の死顔。打詠メ。ほんにもそつと先迄も機嫌よふして居おつたにと。又思ひ出す恩愛の涙。諄くどくとつぶやき。我家へ立帰る。

夫婦が心根思ひやり。暫し詞もなかりしが。先は其方が働き故。万事相濟身が(三十五ウ)悦び。是も偏に菅公の御恵。おろそかには思はれず。某いまだ其御正筆を拝見致さず。幸の折からなれば。ちよと拝見は致されまいか。成程殿様より預り奉る大切な品。瀬左衛門が肌身を放さず。余人は曾つて叶はね共。御心改りし上からは。御先祖へ御目見へスリヤ。赦しくれふとな。ヘエ、忝しとすと立。掾先に立出て手先を清むる手水鉢。心の濁りはいさ知ラぬ。瀬左衛門は一軸を。床に掛置遙に下り。いざ御拝見。イヤナニ瀬左衛門。逆もの事に其詩文。委しう読で聞されよ。某事は幼少より殺生を好て。学問にたづさはらねば一向に文盲無学。其方は一国秀し学者。大義ながら頼申。イヤ是は迷惑千(三十六才)万。併御意に背くは無礼。然らば御免と二腰を。かたへに直し一軸を。つゝしみ敬ひ詠居る。いつのまにかは忍びげん。木影をぬつと平野官兵衛。鏝引さけてキ差足。ぬき足学太郎に渡す共。しらぬ唐橋高声に九枝燈尽唯期暁一葉舟飛不待秋欲以浮生期後会還悲石火向風敲おもひやる心計りはさはらじを。何へだつらん嶺の白雲。と読み下す内鏝追取。思ひかけなき背骨より。床柱へ縫付しは。無慙なりける次第也。此物音に下部共。ヤア御主人を手にかけてしと。

地ハル 追取巻は平野官兵衛刀引抜めつた切。息吹かへす軍蔵も。俱に加勢と追て行。此興未練の犬侍。敬ひ過せし口惜やと身を
 もむ唐(三十六ウ)橋。じろりと見やり。床の一軸奪取。くるく巻て懐中へ納めた顔付。たはこ益引寄。コリヤもがく
 なく。此学太郎が腕の限り。床柱へ縫付たればもふ身動キは成ぬはい。うぬよくも廓において某に恥辱をあたへ。其上
 に五千両の金子。盗ミ取し事けどつた儕。今日態先キ触もさせず。鷹狩を云い立に。此所押かけしは。うぬをまつ此様に
 欺かん身が謀計。夫レ共しらずうかくと。わなにか、つた大馬鹿めと。底意を明す暴悪無道。聞て苦しき目を開き。人畜
 非道の学太郎。御正筆を奪はん為の計略とはいさしらず。欺られしか残念やと。身をもがいたる無念泣。鐘の柄片手に一糸
 ぐり。アツト一声七転八倒。ハレ心よや。瀬左衛門。く。今の詩文最一度読。よまぬか。コウカ。九枝燈尽唯(三十七
 オ)期晩一葉舟飛不待秋欲以浮生期後会還悲石火向風敲。おもひやる心計はさはらじを。何隔らん嶺の白雲。ハ、、、。
 嘲り笑ふ悪逆邪佞の横車。押通されぬ大道寺報ひは。後にぞ三重へ知れけり

第六

大名小路に一際目立多賀屋敷の裏門口。丑満過て夜廻りの。拍子木の音水の音も。いとしんくたる頃しも有。水門くつ
 て忍びの曲者。相図の呼子に軍蔵が徳太夫か。軍蔵様。シテ件の物は手に入たか。まんまと首尾よふ。出かしたく。御
 主人学太郎様。兼て望をかけられし柴舟の花生。手に入しも汝か働き。ホ、適ういやつ。当座の(三十七ウ)褒美はま
 つかうと切付れば。アイヤ待た軍蔵様。コリヤ何となされます。イヤサ此事若も他言致さば主人の身の上。夫故汝を討放
 すはい。ム、スリヤ大切の花生。盗ました其上で。ヲ、汝か命を。ハ、、、、上ませふ。サ、すつはりとやらしやりませ。

ヲ、よい覚悟と振上る刃の下。心底見へた徳太夫。スリヤ私か命を助け。ヲ、サ主人の大望成就せば大名に取立くれふ。ハ、ア有難し忝しと悦び勇む其所へ。

何心なく来かゝる糸や。様子有んと扣れば。二人は夫と氣も付ず。人目にかゝらは一大事。早ふくく梅原が取出す花生後より。うかゞふ糸やが引たくり。逃行所を軍蔵が引戻し。引合はつみ取落したる真の(三十八オ)闇。さくり廻つて梅原が拾ひ取よりかけ出す。やらじとつゞく軍蔵をさゝゆる九郎兵衛其隙に。行方知ず落行梅原。なむ三宝と九郎兵衛は。松浦を丁ど真の当跡を。慕てへ行空の。北辰は君のごとし衆星は諸候に准らふ。鎌倉山の星月夜日本の大小名。爰に集ル其中に。分けて用ひもひくからぬ。棟門高き一かまへ。多賀の太守時元卿の上館。御簾もる琴の音と共に。くゆる蘭奢のそらだきに心とさくく奴共。庭の掃除もそゝくさと。皆一ト所へ寄集り。何と定平よふ掃除も仕廻でないか。何と一ぶく呑べいか。ヲ、鉄内。又トやつた所はたまらないぞよ。イヤたまらぬ次手に。御分地の御子息。大道寺学太郎様。おらが若殿様と買論とやら(三十八ウ)を仕出し。其尻を持つたと云つて。アノ日頃情深い唐橋瀬佐衛門様を。何の事はない罇のでんかく見る様に。串ざしに突キ留たげなはい。ナンダ突留た。エ、其所に此可介が居合ハさばなアと無念の顔色定平おしく。ム、シテお身が其座に居合さは。学太郎様を何とぞするか。イヤ何共エ、せないが。定めて弟御の作十郎様は。残念に有へい。イヤ夫レは格別あの作十郎様は。十二三の時は。殊の外美しい若衆て有たとさそこアノ。大殿様が。かたにお顔をなされてござつて。色事だて。ムアノ大殿様がカ。ヲ、サどふでも女より男色の方はしつくりとして面白イかして存の外の御寵愛。夫レ故兄御瀬左衛門様より外に。新地五百石下され。御近習にお取立。元服はなされても。昔のうつり香。家中一チ番のよ

い男（三十九才）じやと。お裏から持はやすも。やつぱりお若衆の時のゆかりじやと。笑いは鉄内しやくり出。イヤ夫には引かへあの学太郎殿。いかに御本家がだまかに見てござれば拙。其底根性の悪ルさ。親に似た子の鬼子じやと。譏るは下主の常なれや。

物頭折田平吾。出勤か、さぬ忠義の武士。跡に続て九鬼数兵衛。コリヤく奴共。仮りにも御縁家のお噂を軽々しう。仮令身共なればこそ。他の耳へ入ては其方共の為に成ぬ。皆々行と追立られ。ハツとはいへと手持ふさた。こそく立て部やへ行。ヤ何折田殿。一ツ昨夜宝蔵へ盗賊這入。宝紛失と承ハリしが。弥違いござるまい。何とそふでござらふがと。己が相すり仕ながらも。わざと脇から押かくる。九鬼がにが口かまはぬ折田。コレハく（三十九ウ）数兵衛殿。お手前に御存しない事。身共が知ラふ様がござらぬ。去ながら。盗賊の入し事は。おんびんとの御前の仰。取さた致すもよからぬ事。何とそふではござらぬかと。よらずさはらぬ挨拶に。返答しかなの折からに。御上使の御入成りと案内させ。当家の一門大道寺美作守。常にかはりし上使の権柄。家来軍威引連て。広間へこそは入来る。両人は出迎イ。御上使様には御苦労の御入来と。恐し入て敬へは。美作守会釈して。此度武将足利義満公。都金閣御造営首尾能調諸大名の珍器を集。上覧有べき大い会有。然るに当家の重宝。菅原道実公の御正筆。並に紅梅の旗柴船の花生。此三品捧くべき条。定日は追て。今日は某内見の役。左有時は当家の面（四十才）目。身も大慶。此悦びに付て。紅梅姫を学太郎が妻に申受ん望。何はとも有。時元殿に対面致さん。ハ、御内縁は格別。仮初ならぬ御上使。イサ先奥へ御入下されふ。折田殿には大殿へおしらせ有。早くくと数兵衛が。詞に平吾は立て行。

跡見送つて三人が。工む悪事の三ツ鉄輪。軍蔵は小声に成。ナニ数兵衛殿。三品の宝はい取たれば。早枝の滅亡。学太郎様へ家督相続極マれば。我等は大名。ヲ、サ。某逆も当家に有て御味方申も。大名に成たき願ひ。宝揃ふは我々が。望ミの時に見度しらせ。軍蔵様。数兵衛殿。ハレ心よい事ではござらぬかハ、、、。コリヤ。声か高い。此紛レに作十郎めも科に落て討殺せば。悴か為の病も払ふ。ナ心へたるかと（四十ウ）示し合たる其所へ。近習の侍立出で。早奥殿へと案内に。九鬼はお次へ美作は軍蔵諸共入跡へ。

里と町とをないませの姿はいとゞ。ますほの薄。竊に頭ラはれし恋ぞとは。人も三国が跡に付。侍出立の索頭の利八。大しか、へて。ヲ、イ、切も早いおいらん。八文字をま一文字につ、かつか。差合な人に逢て。かぶるのじやござりませぬかへ。ハテ大事ないわいな。おまへも私も此様な。お屋敷風に成て来たからは。咎める人はござんせぬ。とはいへどふぞ殿様に。逢イたい事やと。見廻す後。

いつの間にかは作十郎。逢たか身共が逢さふといふに忸り。ヤアおまへは唐橋作十郎様じやないかいな。三国殿久しいの。何と思ふて此所へ。サア来にくい（四十一オ）所へ出て来た様子。おまへも大方殿様の。咄しに聞ても居やしやんせふ。アノ学太郎様と殿様が。せんど廊のせり合から。意地深い学太郎様。わたしをぜひに身受して。国へおこせと云んすと。軍蔵づらが親方様ンに。其相続にくるはいいな。ム、そんなら夫がうるさ、に。欠落して来たのじやな。アイ。ム、ハテノウ。よい、身共が呑込んだ。ヲ、利八太義じや有た。人の咎メぬ其内に。早ふ帰りやと懐の。鼻紙入に有合せ。紙にひねつて指し出せば。ヲツト有がた山吹の。花は作様近日に。お越を待ておりますと。商ひ上手の気さく者。足早にとそ。出て行。三国

は早ふ逢たさに。心はせけとせかぬ顔。ほんに作様いつ逆も。いかる（四十一ウ）おせはに成ますと。手を合すれば。ム、そんな身共か此様にせは致すが嬉しいか。アイ。嬉しいわいなア。イヤ嬉しいとは忝いと。三国が手をじつと取。引寄ればふり放し。コリヤ何さしやんす唐橋様。何さんすとはよそくしい。浅草へ参詣する供致せ。畏つたと出かけた所が。吉原の大門口を這入かいな。イヤ是は旦那と槌で庭。大黒やが座に付ば。たいこ中居が取巻いて大酒盛の其中に。かたい計を武士とは云ハぬ。ちと和らいて廓の色酒。のみ習へとの御意なれと。イヤ拙者は悪所と申用心の固。きつと守護仕ると。石部金吉去りながら。いか成ル君と松田やの。三国様只今お出といふやいな。雪の素足の八もんじ。若殿の傍へ（四十二オ）ふうはりと。すはつたそもじの顔見ると。テモ扱もあんな器量も有物か。逆も一生暮すなら。こいつをどふぞ女房にと。其時から惚込だだ大夫殿。コレじひじやと思ふて一度の契り。コレ叶へたべと寄添ば。

突放して行裾を。しつかと押へて。三国殿。人にばつかり物いはせ。コリヤどこへ。ハテ知れた事殿様のお傍へ。スリヤは程にくどいても。エ、しらぬはいなと張つよく。びんしやん奥へ走入。

跡に吐息をつつくりと。作十郎らはあたりを見廻し。何か様子を包みし一ツ器。懷中より取出し。日頃身共が心をかけし芙蓉の茶入。手に入しはうまいく。併所持するはあぶな物。いづくにうづみ隠さんと。一人思案のとつおひ風にさそはれて薫りが先へ案内して立出。給ふ花（四十二ウ）の恵み。紅梅姫と聞へしは時元卿の妹君。秘引連出給ひ。作十郎。今出ツ仕しやつたかと云に恠り。ア、イヤ先刻。只今と詞しどろにききもさはく。

さはらぬ体を手をつかへ。此程より病気におかされ。出勤も怠りし故。長髪ながら只今伺公。ヲ、夫レはよふこそ。自らも

館のつれぐ。今必共とついまつの催し。そなたも爰で。エ、アノ哥がるたを取でござりますか。イヤモあなたのかるたなら。拙者が取ふくと念かけておりましたと。紅梅姫の傍近くにしり寄たる膝と膝。引寄られて赤らむ顔。アレ必共か見て居るに。悪い事仕やるかと。振放されてもすがり付。ハテ大事ござりませぬ。まだ此衆。達はついまつの工合を何の知りませふ。何ほうつれなふ(四十三才)なされても。色に出にけり我恋は。人に知ラさずあふよしもがな。ア、コレ申作十郎様。そりや哥の上下が違イますと。差出る 必うつ、の唐橋。恋哥に上下の隔はない。よいお返事を聞迄は。長くもがなと待出る月の丸顔口舌の雨。ぬれにぞ濡し其折から。

三国は采女が手を取て。濟ぬくと連れてくる出合頭に。ヤア作十郎か。若殿様。大夫殿かたとびかゝるを。隔る采女が。ヤイ唐橋。コリヤ三国を何とする。イヤ何共致さぬ惚ました。執心かけし三国大夫。つれて参つて抱て寝ると。手つよき詞に軋る采女。胸を極めて作十郎。采女か膝に膝つ、かけ。若殿様。近頃無体の御願ひなれど。三国大夫を拙者めに。下し置れよ采女様と。云ハれ(四十三ウ)てせき立大名質氣。ヤイ爰な生畜生。有ふ事か有まい事か。儕レが為には現在の。サア譬主人の相イ方でも。君傾城は売物なりや。此唐橋か申受。請出して閨の花。エ、返すくもにつくいやつ。うぬ何としてくれふぞと。腹立俣の腰刀。ふり上る手をしつかと取。何をじたばたさつしやると。突放したる傍若無人。姫も三国もハアくあぶく。とむる三国か首筋とらへ。大夫来やれと作十郎。引立る手を引放す。采女之介が腹立を。なだめる紅梅ひるまぬ唐橋。思はず落ちる帛紗物。取上見れば。コハいかに。紛失したる芙蓉の茶入。スリヤ盜賊は作十郎。様子慥に見届たと。近習の侍九鬼教兵衛。唐橋やらぬと取巻折から。(四十四才) 大守のお成と呼はる声。

不義ではござらぬ。とは又なせ。サ学太郎と縁談の沙汰承りしは今日始て。時元承引の返答致さねば。云号とは申されまい。その所へお心のつかぬ。(四十五ウ)そこ元でもござるまい。ハ、ハ、ハ、何とさふは思し召れぬかと。理の当然に美作は。言句も出ず閉口す。九鬼はたまらずしやくり出。アイヤ恐しながら姫君の御事は隠便に致しても。御殿を揚や同前に。三国をとらへ騒キしは。何と不埒でござるまいか。コレ申若殿。何と思し召るゝぞと。脇へこかして焚付れど。詞にのらぬ温和の采女。サアそふいへば憎い様に聞ゆれど。夫れを糺さば第一に。作十郎より此采女兄上へ対して面目ない。コリヤもふ大目に見たがよさそふな物。ノフ妹姫。ヲ、夫レ。こりやあなたのが御尤。成程赦しなざるがよい。けれどほんに又作十郎も作十郎。去迎は氣の多い。モふつり思ひ切ましたと。(四十六オ)サ、ハ、早ふお託を仕やいのと。云いおしへるも恋草の。思ひの種ぞやるせなき。始終の様子美作か心のゑつば。ヤ何時元卿。今日内見を致すべき三品の宝。奥にて承はれば紛失との義。合点行カしと思ひし所。目前主家の茶人を盗ム作十郎。スリヤ宝の紛失も。疑イかゝる大罪人。引く、つて拷問有レ。但し云訳の筋有ルヤ。サイ夫は。サア何と。何と。サア。く。く。と双方より。腕を廻せとひしめいたり。太守暫しととゞめ給ひ。イヤ其科人は外に有。ムウ外にとはそりや何者。サア其罪人は弟采女。大切なる家の宝預りおる身を以て。傾城に魂奪はれ身持放埒。サ其虚によつて一大事と成たる事。モ(四十六ウ)皆其方か不所存故。サアコリヤ云訳有はいへ。有まいがなと。仰にはつと采女之介。くもりなき身をはらさんも。差当つたる当惑に暫し。詞もなかりしが。胸を極めて覚悟の指添。抜キかくる手にする姫。こは何事と押留る。作十郎御前に向ひ。御宝紛失は采女様の御存ない義。畢竟御預りと申迄。全く兄瀬左衛門か越度。相果たれば弟たる私。腹切て申訳と。既にかうよと見へければ。ヤレ侍

作十郎。傾城へ戯しも今又。宝紛失の罪科も。其方が身に引受る誠心。ホ、イヤモ感するに余り有ば。サ今日より傍用人シ格。千石加増を呉る又紅梅姫も。互いに女なし夫トなし。時元か媒して其方が宿の妻。(四十七才)芙蓉の茶入も髻引出と。仰嬉しく飛立姫。惚た殿様に添そふとは。ほんに出宅の神様が兄上のお心に。入かはつて下されたか。お受くも口ごもり。包ム恋路の室咲は。色香含し風情なり。

唐橋は重る首尾身うごきならぬ碇綱。此俵にとゞまらば兄の敵は誰討つて。修羅の妄執はらさせんと。忠孝二つに踏迷ふ一つの胸に六道の苦患を包。うき思ひ押かくして詞を正し。ハア、冥加に余マリ有難き身の出世。剩へ姫君を給はるとは勿体なき御錠。否には似たれ共。元シ来多病の私なれば。何卒長の御暇御赦免有。病氣補養致し度願ひ。御聞濟下さらば。生々世々の御憐愍と思ひ込で(四十七ウ)ぞ。願ひける。大守一々聞し召。ヲ、そちが願ひ。多病にて勤らずば。向後心任せに出勤を致せよと。聞て恠り軍蔵数兵衛。イヤハヤ唐橋殿はあやかり者。しくじる度に御加増沙汰。夫れさへ有に姫君迄。アイヤこりやそふも有ふ筈。美少年から肝心の。お伽申上たりや酢に付粉に付お取立。余り軋た図のない出世とむしやくしや腹の高笑ひ。此場の時宜を大道寺。心に点き気色を正し。シテ宝の落着は何とでござる。成程捨置れぬは宝の紛失。ナニ采女之介。其方は只今より勘当。エ、。イヤサこりや勘当は上への申訳。宝の有所はサ却て燈台。ナ生は得がたし死は安し。武門の恥辱と(四十八才)心得違いのなき様。ナ合点か。ソレ早追立よと尖なる。詞の内に仁愛も。こもる情ケの一零。

采女は若氣の誤りを。何と云訳詮方涙。是迄つもる不行跡。御寵の有がたく。只今出るは館の名残。随分御無事で。妹

さらばと。すこゝ立は立ながら。遺骨肉同朋の。別れに引る、後がみ。かくと三国はたへかねて。人目いとはずまろび出。殿様のお腹立。采女様の御難義の。元はといへは皆わたしいづくいかなる所へも。御供申て明暮に。御介抱申のがせめて女郎の誠有。あかりを立たたい私か願ひ。殿様。皆様拝みまする。一所にやつて下さりませと取付袂。ぬれ増る。紅梅姫は押隔。余所目はとゞ（四十八ウ）むるふり袖や。落着所をしらせてと。いはぬ色なる山吹の旅の手当を情の饒別。互にさらば。おさらば共。わつていはれぬ割竹を擲きたる下部共。中にまじりて定平が。定めぬ旅の御供と。願ふもよしや。芦火たくふせやの。やどりよるべなみ。追立られて出て行。

余所の歎きを美作が始終呑込頬魂。ケ様の席に長居は無益。気の毒は宝の紛失。大イ言の定日迄はわづか十余日。夫迄に詮義召れば家の大事。ヤコリヤ申迄もない事。時元卿にも無御心配。是は御懇切の御一言。何事も某が思慮に有。や何数兵衛。其方は姫か婚姻の用意申付よ。然らば御上使には。イサ（四十九才）お暇。御苦勞と。式礼目礼大道寺。底意にいただく邪智佞肝。軍蔵引俱し表の方。見送る大守も奥殿へ近習召連入給ふ。

跡にとやかく作十郎。諸手を組て黙然と思案。吐息を月雪の。ながめに増る紅梅姫改まつては今さらに。とふいひかけて唐橋に渡り物なん下心。じつと寄添膝に手を。奥ゆかしくも可愛らし。其手を取て上座にす、め手をつかへ。勿体ない。左礼言を誠と思し召。有がたい御情。私風情と祝言とは。思ひもよらぬ主君の御意。何をか包まん私が。身にせまり申上るは。先キ達て学太郎殿のお手にかゝり。非業の最期を遂たりし。兄唐橋瀬左衛門。仇を討べき一子も（四十九ウ）なく。俱不戴天の兄の敵。余所に見るは比興未練と。いはれんは武士のかきん。白地に言上ならぬは。瀬左衛門横死の砌紛失せし一軸。

正しく夫^レと知なから。宝の詮義兄の敵お家に有て討時は。主同然の御家門筋と。詮方尽て不義放埒の悪名を受。御暇願はんと存せしに。却て御意に叶ひ御褒美御加増。重き御恩は須弥滄海^{しゆみそうかい}。いつの世にかは報すへき。また此上のお情には。拙者か事を思し切。外へ御縁を結はれて。御暇を下さらは百倍増る御厚恩。サ聞分てたへ姫君様と。誠^{地ハル}を明す唐橋か放埒墮弱も本心は。兄^ウの讐討^{あた}会稽^{くわいけい}をす、がん術^{てんじゆ}そ。健気^{けんけい}なる。姫^{地ハル}はとけうのいらへさへ。(五十才)涙にしつむ顔^{かほ}を上。そりや聞へぬつれないそや。年頃^{としがら}こかれ恋したひ結^{むす}ふ糸^{いと}にしは。神様^{ハルキ}にかけし願ひの御利生^ち。夫婦^{ウケン}になれと兄上のおゆるしが出て嬉しいと。思^ウふてゐる間も有事^じか。云いかはせしは偽^{いつわり}り言^{こと}。敵^ウをうたで叶はぬとの其誠^{まこと}より偽^{いつわり}りにも。妻^{つま}よ夫^とと成上^{なる}はどんなうきめもいとやせぬ。此世^{このよ}の契^{ちぎ}りが叶はすはせめて未来^{みらい}は女夫^{めうと}じやと。一ト言いふて。くれもせず。外^ウの殿様をもうけよとは。よふもくいはれた胸欲^{むねよく}と。身^みを打^うふしてないじやくり恨涙^{みん}は春雨^{はるきん}の。篠^{しの}にぬれたる紅梅^{こうばい}のちりも果^つべき。ことく也^{なり}。道理^{道理ウ}にはたと行詰^つりいかゞはせんと唐橋^{ちやうきやう}はため息^{なげき}。(五十ウ)